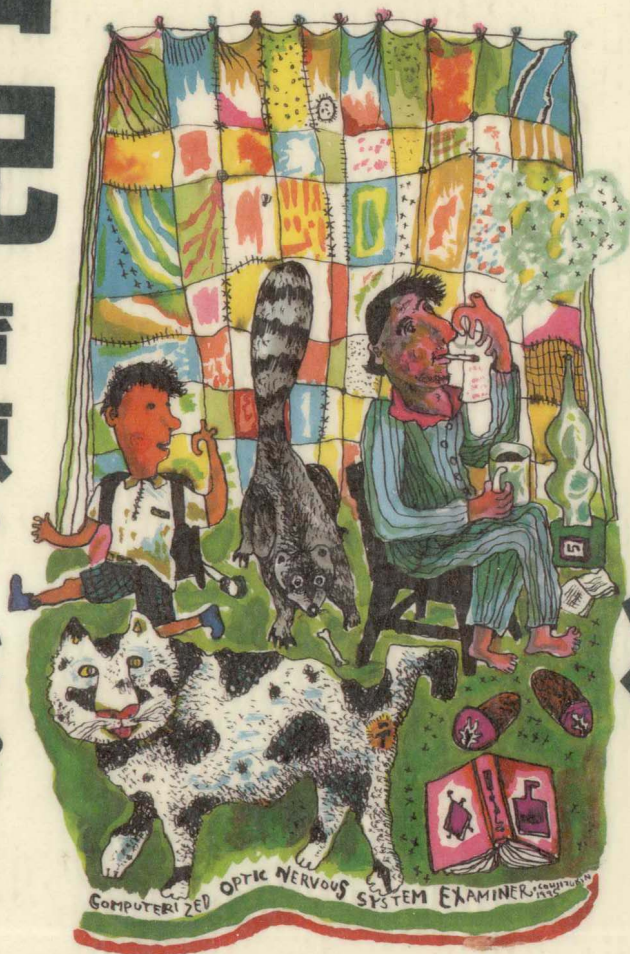


日記

芦原すなお

Tarachine Nikki
Sunao Ashihara

たらちね



ら ち ね

Sunao Asibara

記

芦原すなお

河出書房新社

たちね日記

一九九五年二月一〇日 初版印刷

一九九五年二月二〇日 初版発行

著者 芦原すなお

装画 スズキコージ

装丁 岩瀬 聡

発行者 清水 勝

発行所 株式会社河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三二―二

電話 三四〇四―一二〇一（営業）
三四〇四―八六一一（編集）

振替口座 〇〇―〇〇―七一一〇八〇二

印刷 大日本印刷株式会社

製本 小泉製本株式会社

©1995 Printed in Japan

定価はカバー・帯に表示してあります

落丁・乱丁本はお取替えいたします

ISBN4-309-00965-4

芦原すなお

一九四九年香川県生まれ。

早稲田大学文学部卒。同大学院博士課程中退。一九九〇年、

『青春デンデケデケデケ』で

第二七回文藝賞受賞、一九九

一年、同作品で第一〇五回直

木賞受賞。他の著書に『山桃

寺まえみち』『松ヶ谷町サー

ガ』他がある。

たちね日記

三島由紀夫の『仮面の告白』の主人公は、生まれたときのことを記憶していると言っています。それは嘘だろうと私は思っておりました。あるいは、小説という虚構の中のいささか奇をてらった趣向であろう、と。まあ、記憶とは脳細胞内の化学変化にほかならない——まことに身も蓋もない申しようですけど——というのがどうやら現代の科学の考え方で、もしそれが正しいのなら、つきたてのお餅みたいな赤ちゃんの脳が、なんらかの刺激を化学変化として記録するということは、ありえないことではありません。でも、少なくとも、それが記憶として意識される——つまり、思い出される、ということが起こるためには、おそらくなんらかの——やっ

こ風の骨組ほどの頼りないものであれ——知的粹組というものが必要ではなからうか、さもなければ、脈絡をまったく欠いているわけですから「事柄」と呼びうるような姿にはなりえず、何が何やら判別できっこありません。ですから、出生の瞬間を想起するなどは、トロトロの重湯で塑像をこね上げるがごとき難事でありましよう——そう、私は思っております。

ですが、一概にそう決めつけることはできない、と私は思うようになりました。と申しますのも、この私には、死の瞬間の記憶があるからなのです。これまた生前の私なら、途方もない奇想というか妄想というか、あるいは虚構中の趣向として片づけたところでしょうが、こうして鬼籍に入った今、現に私の生命の火が消える瞬間の記憶があるのですから、どうにも否定のしようがありません。いかにも不思議なことですが、時間の中にある私たちがよく時間の本質を認識しえないのと同様に、生命の本質については、その生命現象の一部にほかならない思考認識活動によつてはついに捕捉しえない定めなのであらうかと、そのことはこうして死んでみてよく了解できた次第です。

その本質は永遠に未知の謎であるとしても、たしかに私は死にました。それはつい十日ほど前のことで、私は四十歳の誕生日を迎えたばかりでありました。「男なら厄年だが、妻は女なんだよ、そんなのあるかい」と言つて、夫は友人の工藤さんの胸にすがつて泣きました。「君、男の厄年は数えの四十二じゃないか、そんなに身も世もなく嘆くものではない」と言つて工藤さんも鼻をすすりながら慰めました。今思えばなんだか間が抜けたやりとりですけど、死んだばかりのときは私もジンときて、もらい泣きをしたものです。自分が死んでもらい泣きはヘンだ、と人は言うかもしれませんが、私の死自体については、私はとくに悲しかったわけではなく、この世——今の私から見れば、「かの世」となったわけですが——のことはもう私事ではなく、利害得失を離れた他人事ですので、したがって私が泣くのも、もらい泣きの一種という理屈になるわけですけど、後に残った夫と子供のことが不憫でたまらなかつたから泣いてしまったので、こういうのは「業が深いからだ」と、死後の世界では申します。

いったい、この世界——死後の世界のことです。まぎらわしゅうございますね

——では、みなさんいたってサバサバしておいで（——と申すか、私どもは靈魂そのものでありますから、プワプワしている、と言った方が適切かもしれません）が、私のように「かの世」に思いを強く残しているものは、比較的稀なのです。

死というものがいいものか悪いものかわからないのだから、徒に死を厭悪するのは知らないことを知っているように思いこんでいる迷妄だ、というようなことをかのソクラテスは申しましたが、この布袋腹の哲人の言ったことはたしかに真実でありました。死とは己が存在するのをやめることだ、死んでしまえばあとは何もなしだ、と磊落に言い放つ人もけっこういらつしゃいますが、それもまた自己の無知を知と混同しているか、あるいは虚勢の皮を被ったセンチメンタリズムなのであります。

死後の世界の消息を喋々するのは慎まなければならぬのですけれど、一言申し上げておくなり、ここは古いお寺の宝物殿などにある「地獄絵」に描かれたようなところでは全くなく、ダンテの『神曲』の挿絵とも似たところはありません。（よくあんなトツパ——私の郷里の言葉で、デタラメということですけど——が描けるものでございます。）そもそも、景色というものはないのです。まあ、あえて譬え

で申すなら、なんだか乳白色の霧が一面にかかった世界で、こうして亡者の魂がふわわただよつておると、まあ、そんな感じでございます。ですから、そうですね、あでやかに咲き乱れる桜並木に、控えめなぼんぼりが灯っている、という情景を思い描いていただいてもよろしいかと存じます。ですが、これはあくまでも感じを伝えるための比喩でございまして、実際にはそんなものもない。では、まったくの無かと申せば、そうでもない。どうも、説明すればするほどわからなくなる世界なのです。それはあたかも、理論物理学で申すところの「宇宙のはて」の、その向こうはどうなっているんだろうと想像するようなものでありまして、普通の方々はあまりよくよく考えない方が身の——いや、おつむのためかと思えます。

そして、私もは靈魂としてこうして存在しておるわけでございますが、そのうち、また別の「あの世」に移るのだそうです。そのうちとはいづごろかと言われても、それはわかりません。そもそも、ある程度の時間がたてば、ということでもないのです。と申しますのも、現に私がこうしております死後の世界では、時間そのものが生者の方々の世界とはまったく別の形態——どうも他にいい言葉が思いつか

ないのが恐縮ですが——をしているわけで、その違いは、また譬えて申しますなら、音と光の違いみたいなものです。で、まあ、便宜的に言つて、私も靈魂はそのうち「別のあの世」と申すか、「もつとあつちの世」、あるいは「次の来世」に引越すわけで、それは、またもう一度死ぬことだ、ぐらゐに考えておいてください。そんな風にして私もは移り変わつてゆくのです。

さて、先に、私は生前の世に強く思いを残している、だから、もらひ泣きしたのだが、そういうのは「業が深い」のである、そして、また私のようなものは比較的稀なのだ、と申しあげました。どのくらい稀かと申しますと、幽霊を見たことのある人くらい稀なのであります。要するに、幽霊というのは現世に強く思いを残した霊が現れてきたものでありますから、幽霊を見たことのある人が少ない、ということとはそういう霊が少ないということなのです。見る側の問題——つまり、見る能力、素質、欲求、といった要素もあるのですが、なんといつても霊の方で出てこない限りは見ることもできないのは申すまでもありません。もちろん科学的ではありません。なにしろ、こういうことは科学には手にも足にもあまる事柄で、科学などは口

ケットを飛ばしたり、コンピュータを作ったりしておればいいので、こういう問題に関しては、涙をたらした三歳のボクちゃんなのです。

ところで、私にはその見る能力がありました。私は五歳のころに母を亡くしました。この世で、幼くして母をなくすほど悲しいことがありましようか。私は熱を出して寝込んでしまいました。熱は一週間たつても下がらず、もちろん食事もとりません。ただ、苦しうに呻吟しておりました。掛かりつけの医師も、手をこまねいて、呻吟しておりました。もちろん父も呻吟しておりました。呻吟の混声三部合唱でございます。

私は寝たきりで、どんどんやせ衰えてゆきました。このままでは遠からず衰弱死してしまうだろうというとき、私の枕元にすーと母が座りました。懐かしい、いいにおいがして、私は目を開きました。

「ごめんなあ」と、母は申しました。それまで父や医師の唸る声は聞こえていたのに、どういうわけか、あたりには誰もおりません。

「お母ちゃん」と、私は言いました。

「ごめんなあ」と、母はまた謝りました。

「お母ちゃん、戻ってきたん？　もうどこへも行かせん？」私は尋ねました。

「戻ってきたよ」と、母は言いましたが、二番目の質問には答えませんでした。

「お母ちゃん、うち、ひもじい」と、私は甘えました。

「今、あげるきにな」と、言つて、母は私に添い寝をして、乳房を私の口に含ませました。私は夢中でお乳を吸いました。弟や妹ができてから、私は母の乳を吸ったことがなかったのです。私は夢中で吸うあまりむせてしまいました。

「ほら、ほら、そなにせかんでもええ。ゆっくりお飲み」と、母は私の頭を優しくなでながら、言いました。

そんな風にして母は二度ばかり私を見舞ってくれました。母のお乳の効能はどんなお薬にも勝ります。私はようやく九日目にして瞼を開いたというわけです。

一方、母の母、すなわち祖母が母の里から来てくれました。祖母も心配で心配で、片時も離れぬようにして私のそばについてくれたそうですが、居眠りをしているとき、ふと誰かに揺り起こされたような気配がして、はっと目覚めたのだ

そうです。そして、

「どうぞよろしに頼まいな」と言う声を聞いたと申します。それで、私の方を見ると、頬に赤みがさして、呼吸も規則的で穏やかになっていたのでした。

「あれは、美代子（というのが母の名前でした）が、心配であの世から戻ってきたんじゃない」と、祖母は真実を述べたのですが、父と医師は信じませんでした。

「ようやく注射が効いてきましたな」と、医師はやや得意気に胸をそらして言いました。

「そのようすな」と、父もほつとして組んだ腕を解きながら申しました。

そして、九日目に目を開いた私が最初に言ったのは、「お母ちゃんはどこ？」ということでした。

「おお、目を覚ましたか。よかったのう。もう大丈夫じゃ」父は私の質問を無視して言いました。

「お母ちゃんはどこ？」私はまたきました。

「お母ちゃんのは、もうおらんのじゃ」

「どこ行つたん？」

「遠い遠いところじゃ」と、父はせいといっぱい穏やかな表現で答えました。

「さつきおつた」と、私は言いました。「戻ってきたんじゃ」

父と医師はしまい忘れた神社の提灯が夕暮れの風に揺れるように、揃って悲しげに首を振りました。

私の言うことを信じてくれたのは、祖母だけでした。祖母にも幽霊を知覚する能力があつたとみえます。たしかにあのとき白い着物を着て髪を後ろに垂らした母が手について、祖母に「頼まいな」と言う姿が見えたとき祖母は申しましたが、それは私が見た母とは違っていました。母はきれいに髪を結って、私が好きだったスミレ色の着物を着ていたのです。祖母の言う母は、祖母の想像の中で祖母の意識が作り上げた姿だったのかもしれませんが、あるいは、その通りだったのかもしれませんが、というのも、見る人によって同じ幽霊が別のように見えることは、まま、あることだからです。とにかく、祖母と私は母が戻ってきたことを知っていたのです。

私はやがて床を離れて、普通にご飯が食べられるようになりました。祖母は帰っ

ていきました。そして帰っていきぎわに、「お母ちゃんが見とってくれるからなあ、元氣出すんよ」と、目と鼻を拭いながら何度も申しました。私は「うんうん」とうなずきました。

私は元氣になりました。ですが心の奥底には、病氣になる前以上の悲しみの塊があつて、そのためによく一人で泣きました。というのも、私は二回、母を失うという経験をしたからです。そしてある意味で、二回目の方が私にはこたえたのでした。最初のときは突然で、私は死というものを知らなかった。その意味がわかってくるとともに熱を出しました。二回目は、よくその意味がわかつていて、それであらためて母を失ったわけです。「今度こそ本当に母は遠くへ行つてしまった」ということが、私にはわかりました。誰もいないときを見計らつて、仏壇の母の真新しい位牌に向かつて拜んだことは何度もあります。小さい子が殊勝にも亡き親の冥福を祈っていたわけではありません。どうぞもう一度出てきて下さいとお祈りしていたのです。でも、それは決してかなえられることのない祈りだと、心の底ではわかつておりました。というのも、もう一度、母が出てきたとしても、いつまでも現世にとど

まることができない以上、私は三回、母を失わなければならないわけです。そのような悲しみを、もう二度と母の霊は私に与えたくないだろう、ということが、幼いながらも私にはわかっていたのです。

ですから、このような現れ方は、現世の人間にとっても幽霊にとってもきついのです。「魂魄この世にとどまりて、恨み晴らさでおくものか」とばかり、恐ろしい姿で化けて出るのは、出る側にとっても出られる側にとっても、ある意味で——妙な言い方ですが——陽気な場合が多いのです。私と母のケースは、双方にとって、実に実に芯にこたえるものでした。

ですから、まだ私は化けて出たことはありません。なにより、夫や息子に、新たな別離の悲しみを味わせたくないからです。また、この世——というのは、現に私がいる死後の世界のことですが——にも、そう、規則のようなもの——これまた一種の譬えなのですが、があります。だれが作った規則かと申しますと、これまでに死んだ、ありとあらゆる霊の総体で、また同時に、現世にありとあらゆる生命を生み出す「大元（おおもと）」の霊なのです。私たちはそれを改まったときには